『今鏡』独自の精神
――〈伝承〉を重んじる心――

陳　文　瑤

はじめに

『今鏡』の主題が道長の栄華を語るというはっきりとした主題を持つ『栄花物語』と『大鏡』ほど明瞭ではないのは事実である。『今鏡』は一体何を書きたかったか。このことについては様々な説が論じられてきた。[1] 多賀宗隼氏は[2]「過去からの変遷推移の因由をさぐりそのあとを辿ることを通じて現状の正しい認識を獲る」ことによって「時勢の変化と推移とを通じて生き続けてきたところの、宮廷と貴族、その文化と生活とを回顧し、積極的にこれを評価する」と『今鏡』を読む。海野泰男氏は[3]多賀氏のこの意見に賛同し、「『今鏡』には時に煩瑣なまでの系譜説明が多いのであるが、系図を跡づけることこそ、宮廷貴族社会の推移と不変を確認する作業に他ならなかったのである。そして枝分れした系図のそこかしこに、『今鏡』作者は、全盛期に遜色のない宮廷貴族社会の文化と生活が脈々として健在であることを証明しようとした」と指摘した。両氏の意見は一応首肯できるが、『今鏡』は変遷推移とその中の不変を確認することに止まっているのであろうか。

『今鏡』を読むと「伝へ保つ」や「伝へうける」など〈伝ふ〉関係の言葉が頻りに目に入り、〈伝ふ〉は『今鏡』を読み解く上では一つのキーワードと考えられる。また、『今鏡』の主題を考える時、これらの言葉が担う意味を探るのは重要だと思う。本稿では、〈伝ふ〉関係の言葉に着目し、『今鏡』の〈伝承〉重視の姿勢を明らかにしたい。なお、〈伝承〉とは、簡単にいえば、ものごとが伝達・継承されることである。本稿で使われている〈伝承〉は「伝承文学」など狭義の「伝承」の意味ではなく、文化や技芸なども含む広義の〈伝承〉である。

一　〈伝承〉に対する熱い視線

1　歴史物語の中で見る

『今鏡』が〈伝承〉について並々ならぬ関心を持っていることは本文から読みとることが出来る。例えば、藤原宗俊が豊原時光から大食調の入調の伝授を受ける時の話があるが、さらにその余話として、次のように武吉が時光に名簿をさし出して、大食調の入調の伝授を請うた話も語られている。

かの武吉もその道の上手なりけるに、誰にかおはしけむ、一の人の「誰にならひたるぞ」と問はせ給ひければ、「道の者にもあらぬ法師ばら、よくならひたるものありけるになむ伝

て侍る」と申しければ（ふぢなみの下第六「絵合の歌」〈下・11頁〉）

〈伝承〉の話になると、作者の筆が思わず走ってしまうようである。

このような性格は他の歴史物語にも見られるのであろうか。歴史物語の中で〈伝承〉と関連があると思う用例を次に一覧にした。

作品名	用例数	巻名	章段名	用例
栄花物語	6	巻第八	はつはな	蒔絵の御櫛の笥一双は**伝はりて**
		巻第十二巻	たまのむらぎく	年ごろの**御伝はり物ども**、数知らず塗籠にて焼けぬ。
		第十七	おむがく	世にめづらかなる御心掟どもと見ゆれば、わざと思はぬことどもをだにこそ、**書きつづけ語り伝ふめれ**。
		巻第二十三	こまくらべの行幸	行く末頼もしきこと大原の、千年を松の風に**吹き伝へ**
		巻第三十一	殿上の花見	岸のまにまに並み立てる松も、千年までかかることを波風静かに**吹き伝へたてまつらな**んとおぼゆ。
		巻第三十八	松のしづえ	かたちいときよげに、ものものしきさましたまへり。笛いとをかしく**吹き伝へたまへり**。
大鏡	2	六十二代	村上天皇	末の世まで**伝ふる**ばかりのこと言ひおく人、優にはべりかしな。
			基経	帝の御末もはるかに**伝はり**、おとどの末もともに**伝はり**つつ後見申したまふ。
今鏡		序		祖父に侍りしものも、二百年に及ぶまで侍りき。親に侍りしも、そればかりこそ侍らざりしかども、百年にあまりてみまかりにき。**姪もその齢を伝へ侍るにや**、いまいまと待ち侍りしかど、今はおもなれて、常にかくてあらむずるやうに
				昔の風も**吹き伝へ給ふらむ**。しかるべき言の葉をも**伝へ給へ**
		すべらぎの下第三	大内わたり	多くの宮たちの御中に、**天の下伝へ保たせ給ふ**、いとやむごとなき御栄えなり。
			花園の匂ひ	倶舎の頌など読ませ給ひて、軸々読み尽くさせ給ひて、その心解き表はせる書どもをさへ**伝へうけさせ給ひて**、智恵深くおはしましけり。

20

		みこの宮、**宝の位など伝へ保たせ給ひき。**
ふちなみの第四	宇治の川瀬	書の沙汰などは、常にせさせ給ふともきこえざりしかども、天台の止観とかいふ書を、皇覚といひて、杉生の法橋といひしに、**本書ばかりは伝へさせ給ひてけり。**
ふちなみの中第五	飾太刀	堀河大納言に、前書とかきこゆる書**受け伝へさせ給へりけり。**その書は、匡房の中納言より**伝はりて、読み伝へたる**人かたく侍なるを、この殿ぞ**伝へさせ給へりける。**今は**師の伝へ**も絶えにたるにこそ侍なれ。 **世々を経て伝へて持たる**飾太刀のいしづきもせずあや思しめせ 都わかれて土佐の国へおはしけるに、これもりとかいふ陪従御送りに参りける道にて、**琴のえならぬ調べ伝へ給ふ**とて、その文の奥のに歌詠み給へりけるこそ、あはれに悲しく承りしか 唐土に、昔、嵇叔夜といひける人の琴の優れたる調べを、この世ならぬ人に**伝へならひて、**一人知れりけるを、袁孝尼とかいひける琴弾きの、あながちにならはむといひけれども、ないがしろに思ひて許さざりけるほどに、罪を蒙りける時は、この調べの永く絶えぬることをこそ悲しびけれ、**この琴の調べを伝へ給ひけむこそ、**かしこく頼もしくも承りしか。
	水茎	宮内の大輔は、大納言の末なれば、よく似らるべきにて侍れど、一つの様を**伝へられたるにや、**常に見ゆるやうには変りてぞ侍なる。
	故郷の花の色	三昧の阿闍梨良祐といひしやむごとなき真言師によく**伝へならひ給ひて、**心ばへふるまひありがたく、僧のあらまほしきさまにて、さる人また出で来がたくなむおはしける
ふちなみの下第六	絵合の歌	道の者にもあらぬ法師ばら、**よくならひたるものありけるになむ伝へて侍る** **この君伝へられむこと、**たちまちの事にあらじ

	宮城野	この御弟に、頭中将実守ときこえ給ふも、**和琴ならひ伝へ給ふなり。**
	新枕	まじり丸といふ笛をも**伝へり。** 時元が兄にて、時忠といひしも**作り〔つ〕たへ侍りけり。** そのまじり丸は、時忠が子の〔時〕秀といひしが**伝へたりし**を、子も侍らざりしかば、**このごろはたれか伝へ侍らむ。**
むらかみの源氏第七		わが身はいかでありなむ。道の人にて**この笛いかでか伝へざらむ** 年たけて、夜、道たどたどしきを、手を引きつつまかりければ、いとうれしく思ひて、えならず調ぶるやうをも**伝へてはべりければにや**、いと殊なる音ある笛にぞ侍なる。 この右の大臣、**かかる伝へておはするのみにもあらず、家の事にて胡飲酒舞ひ伝へ給ふ事も**、いみじくその道得給ひて、心ことにおはしける。
	武蔵野の草	その舞も資忠とてありし舞人の、正貫といひしといどみて、祇園の会の囃しの日、取り殺されにければ、忠方、近方などいひしも、まだいはけなくて、**習ひも伝へねば**、太政の大臣の忠方には教へ給へるぞかし。しかはあれども、**この大殿ばかりはえ伝へざるべし。** 正貫は出雲に流されて、かの国の司の下り侍りけるにも教へ、また子のともさだとかいふも、京へ上りて、あきなりといひし中納言に教へなどすときこえしかども、この大殿**伝へ給へる**ばかりは、いかでか侍らむ。 兄の忠方は**胡飲酒を伝へ**、弟の近方は**採桑老を伝へ**、弟の天王寺の公貞といひしに**伝へて**、この頃はその子どもの兄弟の筋分れて舞ひ侍るとなむ。 歌詠み、笙の笛よく吹き給ひけり。公里といひしが**調子をすぐれて伝へたりける**を、写しならひ給へりけるとぞ。

8

		その御弟に能俊の大納言の女の腹に、当時新中納言雅頼ときこえ給ふこそ、入道治部卿の御子には**文など伝へ給ふらめ**。家を継ぎ給へる人にこそ。
みこたち第八	腹々のみこ	昔の風**吹き伝へさせ給ふ**、いとやさしく。
		仁和寺の宮、**御室伝へておはしますなり**。
		妹の宮は、六条の院の宣旨養ひ奉りて、**かの院伝へておはしますとぞきこえさせ給ふ**。
むかしがたり第九	まことの道	かくて後にぞ、山、三井寺の僧たちも、**やすらかに読み伝へ給ふなる**。
うちぎき第十	作り物語の行方	**世の末まで伝へなどし給ふこそ**、普門の示現などもおぼえめ。
第一代	神武天皇	神世より**つたはりて**剣三あり。
十一代	垂仁天皇	いきたる人をもちてしぬるにしたがへん事は、**いにしへよりつたはれる事なれども**、われこのことをみきくにかなしき事かぎりなし。
		九十三年と申しにぞ、後漢の明帝の御ゆめに、こがねの人きたると御覧じて、あくるとし天竺よりはじめて**仏法もろこしへつたはりにし**。
卅五代	推古天皇	天竺よりもろこしに**仏法つたはりて**三百年と申しに、百済国に**つたはりて**、百年ありてぞ、このくにへわたり給へりし。
卅九代	斉明天皇	七月に智通智達といふゝたりの僧をもろこしにつかはして、玄奘三蔵に法相宗をば**つたへならはせさせ給しなり**。
五十一代	桓武天皇	九月二日伝教大師もろこしへわたり給て**天台の教文つたふべきよし**の宣旨をくだされ侍し也。
五十二代	平城天皇	同二年十月廿二日に弘法大師もろこしよりかへりたまへりき。東寺の仏法これより**つた**

増鏡	0		はれりしなり。

まず、先行作品の『栄花物語』『大鏡』を見てみよう。『栄花物語』では〈伝承〉と関連があると思う記事が以下の6例である。

①宣耀殿に、故村上の帝の、かの昔の宣耀殿女御にしたてまつらせたまへりけるには、蒔絵の御櫛の笥一双は伝はりて、今の宣耀殿女御の御方にぞさぶらふを、その中をいみじう御覧じ興ぜさせたまひしを、これに御覧じ合するに、かれはことのほかにこたいなりけり。（巻第八「はつはな」（①444頁））

②上の御前は、かかる御思ひにて一条殿におはしまし、大宮も殿の御前も内裏におはしましける夜しも焼けぬれば、つゆ取り出でさせたまふ物なく、年ごろの御伝はり物ども、数知らず塗籠にて焼けぬ。（巻第十二「たまのむらぎく」（②80頁））

③僧どもに昨日の残りの物、大柱などみな被けさせたまひて、かねての御用意なきことどもなれど、世にめづらかなる御心掟どもと見ゆれば、わざと思はぬことどもをだにこそ、書きつづけ語り伝ふめれ。（巻第十七「おむがく」（②292頁））

④日本には、箒木と立ち栄えおはしましてより、行く末頼もしきこと大原の、千年を松の風に吹き伝へ、朝夕に喜ばしきこと有栖川、ひとたび澄める水の心のどけき世に、多くの政をすべおこなはせたまふ左大臣も、瀬尾の山の雲もへだたらぬ御仲らひなり。（巻第二十三「こまくらべの行幸」（②424頁））

⑤岸のまにまに並み立てる松も、千年までかかることを波風静かに吹き伝へたてまつらなんとおぼゆ。（巻第三十一「殿上の花見」（③209頁））

⑥梅壺の御せうとは中将になりたまひぬ。かたちいときよげに、ものものしきさましたまへり。笛いとをかしく吹き伝へたまへり。（巻第三十八「松のしづえ」（③442頁））

①②は品物が伝わってきた、または伝わってきた物の焼失を記述するもので、『今鏡』で注目される〈伝承〉とはほど遠いものである。③～⑥は『今鏡』の〈伝承〉に近いが、『今鏡』の〈伝承〉に対する熱い態度ほどではない。

一方、『大鏡』では、以下の2例のみである。『今鏡』のような〈伝承〉に対する関心はないようである。

①げにいかにとおぼゆるふしぶし、末の世まで伝ふるばかりのこと言ひおく人、優にはべりかしな。（六十二代「村上天皇」40頁）

②帝の御末もはるかに伝はり、おとどの末もともに伝はりつつ

後見申したまふ。（「太政大臣基経」71頁）

先行の両作品と比べてみると、『今鏡』は〈伝承〉に着目していることが明らかであろう。この点について、『今鏡』以降の『水鏡』『増鏡』ではどうであろうか。

『水鏡』では〈伝承〉と関連があると思う記事が8例である。

①三剣のこと

神世よりつたはりて剣三あり。（第一代「神武天皇」34頁）

②土師氏が土の人形を造り、御陵の中に籠めたこと

いきたる人をもちてしぬるにしたがへん事は、いにしへよりつたはれる事なれども、われこのことをみきくにかなしき事かぎりなし。（十一代「垂仁天皇」66頁）

③仏法が天竺より中国へ渡ったこと

九十三年と申しにぞ、後漢の明帝の御ゆめに、こがねの人きたると御覧じて、あくるとし天竺よりはじめて仏法もろこしへつたはりにし。（十一代「垂仁天皇」70頁）

④仏法の子細のこと

天竺よりもろこしに仏法つたはりて三百年と申しに、百済国につたはりて、百年ありてぞ、このくにへわたり給へりし。（卅五代「推古天皇」213頁）

⑤法相宗のこと

七月に智通智達といふゝたりの僧をもろこしにつかはして、玄弊三蔵に法相宗をばつたへならはせさせ給しなり。（卅九代「斉明天皇」241頁）

⑥伝教大師が唐へ渡ること

九月二日伝教大師もろこしへわたり給て天台の教文つたふべきよしの宣旨をくだされ侍し也。（五十一代「桓武天皇」393頁）

⑦弘法大師が帰朝し、東寺の仏法を流布させること

同二年十月廿二日に弘法大師もろこしよりかへりたまへりき。東寺の仏法これよりつたはれりしなり。（五十二代「平城天皇」401頁）

①は、神代から伝わってきた剣のことで、②は生きた人間を死者に副葬する風習の伝えで、二例とも、いにしえの時代からの物事の〈伝承〉である。それ以外の③～⑦はすべて仏法伝来関連の記事である。『水鏡』で語られる〈伝承〉は簡略で事実として述べるように思われる。また、②に語られるのはよくないと思われる〈伝承〉を改めた話である。『今鏡』の〈伝承〉に対する一貫とする姿勢が見られる。

『増鏡』では該当のものは見あたらない。

以上、『今鏡』の他四つの作品を見てきたが、これにより『今鏡』の〈伝承〉重視の性格がよりはっきりと浮き彫りにされる。

2　他ジャンルの作品と比較する

さて、歴史物語の中から見て『今鏡』の〈伝承〉に対する特異な態度がわかた。[4] 他ジャンルの作品から見たらどうであろうか。

大きな影響を受けたといわれる『源氏物語』で見てみる。『源氏物語』では、主に「明石」の巻、「少女」の巻、「若菜上・下」の巻などに〈伝承〉が見られる。

「明石」の巻では、初夏の月夜に、源氏が琴を弾き、明石入道と語る場面である。最初は源氏が一人で琴を弾くが、それを聞いて心を動かされた明石入道も加わり、琵琶や箏も持ち出され、音楽についての話題が展開していく。

①遊ばすよりなつかしきさまなるは、いづこのかはべらん。なにがし、延喜の御手より弾き伝へたること三代になんなりはべりぬるを、かうつたなき身にて、この世のことは棄て忘れはべりぬるを、ものの切にいぶせきをりをりは掻き鳴らしはべりしを、あやしうまねぶ者のはべるこそ、自然にかの前大王の御手に通ひてはべれ。山伏のひが耳に松風を聞きわたしはべるにやあらん。いかで、これ忍びて聞こしめさせてしがな（「明石」〈②242頁〉）

②あやしう昔より箏は女なん弾きとる物なりける。嵯峨の御伝へにて、女五の宮さる世の中の上手にものしたまひけるを、その御筋にて、とりたてて伝ふる人なし。すべてただ今世に名を取れる人々、かきなでの心やりばかりにのみあるを、ここにかう弾きこめたまへりける、いと興ありけることかな。いかでかは聞くべき（「明石」〈②242頁〉）

入道は「延喜の御手より弾き伝へたること三代になんなりはべりぬる」と自分の琴の系譜が醍醐天皇の奏法を伝えて三代になることを話し、出自と家柄の良さを暗示する。明石入道は延喜帝こと醍醐天皇直伝の弟子から教えを受け、さらにその奏法はその娘明石の君にも伝わっている、というのである。源氏は明石入道の話を聞いて、入道の家系あるいは血筋の高さを再認識する。源氏が「嵯峨の御伝へにて、女五の宮さる世の中の上手にものしたまひけるを、その御筋にて、とりたてて伝ふる人なし」と、女五の宮に伝えられた嵯峨天皇の奏法が今は絶えたことをいい、現在評判の奏者は大したことがないというのは、都でも由緒のある相承が見られなくなっていたからである。源氏は一気に明石の君への関心を膨らませて、ぜひその琴を聞きたいという。新しい恋へのステップを踏み始めようとしている。源氏にとっても、明石一族にとってもターニングポイントの入り口とも言える重要な場面である。このような重要な場面で、琴の〈伝承〉が語られることによって、明石入道の血筋のよさを物語り、それが〈正統化〉されるのである。

二　〈伝承〉の内容

俊蔭一族の話を語る『うつほ物語』は〈伝承〉の視点が〈琴〉の伝承に集中していたが、『今鏡』では〈伝承〉の視点は多彩である。以下、大きく「皇統・政治」と「学問・技芸」に分けて、〈伝承〉の内容について考察する。

1　皇統・政治の〈伝承〉

『今鏡』では後白河天皇の御代以前を「過ぎたる方」、後白河天皇の御代を「今の世」と言っている（すべらぎの下第三「大内わたり」）。これは『今鏡』成立と言われている嘉応二（1170）年当時、まだ後白河院政中にあるからと思われている。

その後白河天皇の即位については、『今鏡』が次のように語り出された。

当時の一院は、鳥羽の院の第四の御子、御母待賢門院の院、大治二年丁未の年、生み奉らせ給へりしにやおはしますらむ。多くの宮たちの御中に、天の下伝へ保たせ給ふ、いとやむごとなき御栄えなり。（すべらぎの下第三「大内わたり」〈上・308頁〉）

後白河天皇即位の事情については、すべらぎの下第三「虫の音」にみえる。近衛天皇の崩御の後、次の天皇について鳥羽法皇が思い悩んだことは、『愚管抄』第四に見える。『愚管抄』によれば、忠通は、四宮雅仁親王が二十九才になっているので、まずこれを即位させるべしとの意見を出し、院の意向が定まったとある。その裏に実は幼い頃から二条天皇を養育した美福門院の強い意思があることは『山槐記』永暦元年十二月四日条で窺うことができる。[3]

このような事情があるために、後白河院政の出発点とも言える後白河天皇の即位について、『今鏡』は多くの皇子たちの中で「天の下伝へ保たせ給ふ」と表現するのでろう。また、二条天皇について語られるところでは、二条天皇の即位について「宝の位など伝へ保たせたま」ふという。

院位に就かせ給ひしには、当今の一の皇子にておはします上に、女院の御養ひ子にて、近衛の帝の御代りとも思しめして、この宮に位をも及ぼし奉らむと計らはせ給ひければ、都へかへり出でさせ給ひて、みこの宮、宝の位など伝へ保たせ給ひき。末の世の賢王におはしますとこそは承りしか。（すべらぎの下第三「花園の匂ひ」〈上・347頁〉）

皇統継承争いの中で、後白河院政が確立したことを語るとき、皇統の〈伝承〉が特に語られる。

2　学問・技芸

(一)書物の〈伝承〉

二条天皇の学問についての箇所では書物の〈伝承〉が語られている。

この帝の御母、生みおき奉りて失せ給ひにしより、鳥羽の女院養ひ奉り給ひて、幼くおはしましほど、仁和寺におはしまして、五の宮の御弟子にて、倶舎の頌など読ませ給ひて、軸々読み尽くさせ給ひて、その心解き表はせる書どもをさへ伝へうけさせ給ひて、智恵深くおはしましけり。（すべらぎの下第三「花園の匂ひ」〈上・347頁〉）

二条天皇は仏道に熱心であり、仁和寺の覚性法親王の弟子となり、倶舎の頌などを誦し、巻々のすべてを読み尽くし、その意味

を説明した倶舎頌疏の書を覚性から伝受したというのである。

同じく、仏教書物の〈伝承〉が藤原忠実のところにも見える。

書の沙汰などは、常にせさせ給ふともきこえざりしかども、天台の止観とかいふ書を、皇覚といひて、杉生の法橋といひしに、本書ばかりは伝へさせ給ひてけり。（ふぢなみの上第四「宇治の川瀬」〈上・464頁〉）

忠実は杉生法橋に天台の『摩訶止観』の本文を伝授したというのである。

なぜ『今鏡』はこれほど書物の〈伝承〉に熱い視線を注ぐのであろうか。ふぢなみの中第五「飾太刀」で頼長が「前書」[8]という中国の書物を伝承することを語る箇所で、その答えの糸口を見出すことができる。

堀河大納言に、前書とかきこゆる書受け伝へさせ給へりけり。その書は、匡房の中納言より伝はりて、読み伝へたる人かたく侍なるを、この殿ぞ伝へさせ給へりける。今は師の伝へも絶えにたるにこそ侍なれ。（ふぢなみの中第五「飾太刀」〈上・538頁〉）

頼長の学問への執心はその日記『台記』にきわめて明らかに窺える。『毛詩』『周礼』『論語』『老子』『荘子』『史記』『漢書』『文選』など、多岐にわたっている。その頼長が堀河大納言師頼から『漢書』を伝授されたという。その書は匡房から伝わって、読み伝えた人はめったにないのであるが、頼長が受け継いだ。それほどのものを伝授したことに対して、『今鏡』は肯定の態度を取っている。波線部「今は師の伝へも絶えにたるにこそ侍なれ。」と、師伝が途絶えることを嘆いている。〈今〉という時点は、〈伝承〉が絶えているため、その嘆きから〈伝承〉がいかに受け継がれていくのかは『今鏡』の一大関心事になるのであろう。

このような心は書物の〈伝承〉のみならず、琴曲などの〈伝承〉にも同じ様に窺える。

(二)芸の伝承

①琴曲の伝承

琴の〈伝承〉については、『うつほ物語』をはじめ、『源氏物語』、『狭衣物語』でもよく語られている。平安貴族にとって、琴の教養は不可欠のものだということはいうまでもない。

頼長の子師長は保元の乱により、土佐に流される際に次のようなエピソードが語られる。

都わかれて土佐の国へおはしけるに、これもりとかいふ陪従御送りに参りける道にて、琴のえならぬ調べ伝へ給ふとて、その文の奥のに歌詠み給へりけるこそ、あはれに悲しく承りしか、

教へ置く形身を深くしのばなむ身は青海の波に流れぬ

とかやぞ聞き侍りし。青海はかの調べの心なるべし。いと悲しくやさしく侍りけることかな。（ふぢなみの中第五「飾太刀」〈上・549頁〉）

師長は同行の惟盛という陪従に「琴のえならぬ調べ」青海波を伝授したという。このエピソードに続けて、中国の嵇叔夜の話が次のように語られている。

唐土に、昔、嵇叔夜といひける人の琴の優れたる調べを、この世ならぬ人に伝へならひて、一人知れりけるを、袁孝尼とかいひける琴弾きの、あながちにならはむといひけれども、ないがしろに思ひて許さざりけるほどに、罪を蒙りける時は、この調べの永く絶えぬることをこそ悲しびけれ、この琴の調べを伝へ給ひけむこそ、かしこく頼もしくも承りしか。

（ふぢなみの中第五「飾太刀」〈上・549頁〉）

嵇叔夜は広陵散という秘伝の調べを習得し、簡単には人に教えなかったが、罪を蒙った時に、この調べが永久に絶えてしまうという。師長は波線部「この調べの永く絶えぬること」を悲しみ、秘曲青海波を惟盛に伝授したという。〈伝承〉が絶えることを防止した師長の行動に対し、『今鏡』は「かしこく頼もし」いと評価する。

②名笛の伝承

『今鏡』の〈芸の伝承〉に対する関心は琴のみではない。源雅定は笙の笛に長じることから、

まじり丸といふ笛をも伝へり。（中略）時元が兄にて、時忠といひしも作り〔つ〕たへ侍りけり。（中略）そのまじり丸は、時忠が子の〔時〕秀といひしが伝へたりしを、子も侍らざりしかば、このごろはたれか伝へ侍らむ。時忠、刑部丞義光といひし源氏の武者の好み侍りしに教へて、その笛をも取り籠めて侍りけるほどに、義光、東の方へまかりけるに、時忠も「いかで年頃の本意に送り申さむ」とて、供して行きけるを、この笛の事を思ふにやと心得けむ、「わが身はいかでありなむ。道の人にてこの笛いかでか伝へざらむ」とて、かし給ひたりければ、これよりこそ暇乞ひてかへり上りにけれ。（中略）時元は若かりける、さだよしといひて、えならず節得〔た〕る道の者ありけるが、年たけて、夜、道たどたどしきを、手を引きつつまかりければ、いとうれしく思ひて、えならず調ぶるやうをも伝へてはべりければにや、いと殊なる音ある笛にぞ侍なる。（むらかみの源氏第七「新枕」〈下・241～242頁〉）

と、豊原時元が作り雅定に伝わっているという笙「新まじり丸」及び時忠の「まじり丸」について、二つの名笛まじり丸の伝承話が語られる。時忠の作ったまじり丸はその子時秀に伝えられたがその後行方不明となったこと↓時忠は源義光に笙曲を教え、まじり丸を貸したこと↓義光が奥州に下向する時、時忠が後について来たので、義光は途中でまじり丸を時忠に返してやった事などを述べている。一つの笛の〈伝承〉についてこれほど紙幅を費やすことからも『今鏡』の〈伝承〉に対する関心が窺える。

③舞の伝承

この雅定は、胡飲酒も相伝していたという話がまじり丸の話に引き続いて語られている。

この右の大臣、かかる伝へておはするのみにもあらず、家の事にて胡飲酒舞ひ伝へ給ふ事も、いみじくその道得給ひて、心ことにおはしける。その舞も資忠とてありし舞人の、正貫といひしといどみて、祇園の会の囃しの日、取り殺されにければ、忠方、近方などいひしも、まだいはけなくて、習ひも伝へねば、太政の大臣の忠方には教へ給へるぞかし。しかはあれども、この大殿ばかりはえ伝へざるべし。正貫は出雲に流されて、かの国の司の下り侍りけるにも教へ、また子のともさだとかいふも、京へ上りて、あきなりといひし中納言に教へなどすときこえしかども、この大殿伝へ給へるばかりは、いかでか侍らむ。兄の忠方は胡飲酒を伝へ、弟の近方は採桑老を伝へ、弟の天王寺の公貞といひしに伝へて、この頃はその子どもの兄弟の筋分れて舞ひ侍るとなむ。（むらかみの源氏第七「新枕」（下・246頁））

村上源氏による童舞はすべらぎの上第一「黄金の御法」、すべらぎの中第二「紅葉の御狩」、「鳥羽の御賀」に見られる。胡飲酒の舞は、村上源氏に相承され、雅定がこの舞を初めて舞ったのは、康和四（1102）年の白河院五十の賀の時であった。ここでは雅定が胡飲酒の舞に優れていたことから、多資忠と山村正貫の事件へと話が転じている。資忠が正貫と争って殺された後、資忠の遺児忠方に、久我太政大臣雅実とその子雅定が胡飲酒の舞を教えたという。このように舞の〈伝承〉についても詳しく語られる。

以上、『今鏡』の〈伝承〉の内容を検討してきたことにより、『今鏡』の〈伝承〉に対する強い関心は、〈伝承〉が断絶してしまうという恐れや悲嘆から発するものだとわかる。決して『源氏物語』の〈伝承〉のように物語の展開上に一役を担ったものではないが、一貫とする姿勢で語られている。

おわりに

時代の移り変わりによって、物事が失われていき、またそれに変わる新たな物事が生まれてくるのは世の常である。動乱の時代には、今まで続いてきた物事が加速度的に失われていくものである。良きものをいかに〈伝承〉していくかは時代の大波に翻弄される人々にとって緊急課題であろう。『今鏡』はそのような時代様相を反映していると言えよう。

※本文の引用は、『今鏡全釈』（海野泰男氏（昭58、福武書店）、『栄花物語』（新編日本古典文学全集）、『大鏡』（新編日本古典文学全集）、『水鏡全注釈』（平10、新典社）、『源氏物語』（新編日本古典文学全集）による。引用末尾の（　）内に巻名・頁数の順に記す。なお、傍線、波線は私に付した。

る。また、『古今著聞集』第八の（宇治内大臣頼長師恩を重んずる事）に漢書を師頼に習ったことが見える。

――チェン・ウェンヤオ、広島大学大学院博士課程後期在学――

〔注〕

（1）戦後まもなく提示されてその後の『今鏡』観に大きな影響を与えた板橋倫行氏（日本古典全書『今鏡』解説、昭25）は、「芸文韻事や風流閑雅」に関心があることから、『今鏡』の主題を「王朝荘園貴族制の没落傾向と衰退の現実から逃避」するための芸文史とする。それに異議を唱えたのは、加納重文氏（「今鏡の世界――今鏡の政治意識の所在とその解明」〈『国語国文』37巻6号、昭43〉）である。加納氏は『今鏡』が政治、特に白河院政に関心があると見る。竹鼻績氏（「今鏡総論」〈歴史物語講座第四巻『今鏡』、平9、風間書房〉）は王権回復を果たした後三条帝とそれを継承した白河・鳥羽・後白河の院政、つまり「中世王権」の形成過程をみるものと考える。

（2）多賀宗隼氏「今鏡試論」（『史学雑誌』、昭49・2）

（3）海野泰男氏「解説」（『今鏡全釈』〈昭58、福武書店〉）

（4）この点について、すでに大木正義氏は「第一章　芸文韻事と栄えの叙述「第一節　伝ふ」」（『今鏡の表現論考』〈平9、新典社〉）において指摘している。

（5）この点については、海野泰男氏『今鏡全釈』（昭58、福武書店）補注「後白河天皇即位の経緯」の項に詳しい。

（6）『今鏡新註』（関根正直氏（昭2、六合館））をはじめ、『今鏡』の注釈書では、「前書」を「前漢書」の脱字と考えてい